



宙合楼と魚水門

Special Features / Engineering's Heritage IV Learn from the wisdom of our predecessors Korea

# 李氏朝鮮の王たちを育んだ「昌徳宮の秘苑」

## 韓国・ソウル



UENO Junto

特集  
土木遺産IV  
先人たちに叡智を学ぶ 韓国

株式会社日本構造橋梁研究所/設計第二部設計第四課/課長  
上野 淳人

### 1—王宮の庭苑

李氏朝鮮王朝500年の都として栄えたソウルは、現在も韓国の首都として発展を続ける街である。ソウルで一番の繁華街である明洞から北に2kmほどのところにある昌徳宮は、ソウルに残る五大宮の一つである。

昌徳宮は、正宮である景福宮の離宮として建設されたが、景福宮が戦災や火災で使えなくなると、国王は昌徳宮で政務を執り生活を送った。その期間は270年にも及び、正宮である景福宮よりも長かった。そのため、昌徳宮は今でも当時の国王の生活色を濃く残している。

昌徳宮の裏には、王宮の庭苑である秘苑が残されている。秘苑は李氏朝鮮時代の造園の粋といわれ、伝統的な造景手法がよく保存されている代表的な宮殿庭苑である。

幾多の国々において宮殿庭苑は華美なものが多い。しかしこの庭苑を訪れた人は、王宮の庭苑でありながら華麗なところが全くないことに戸惑いを覚えるかもしれない。また、京都の石庭のような人工的な造園でもない

ことを不思議に思い、東西500m南北800mにも及ぶ広さに驚くだろう。

ここは、あくまでも美しい自然をそのままに、建築物や樹木、溪流、歩道が自然と一体になるように配置された広大な庭苑なのだ。なぜ、このような広大で自然そのままの庭苑が造られたのであろうか。

### 2—波乱に満ちた歴史

李氏朝鮮は、1392年和寇の討伐で功名を立てた李成桂によって建国され、1910年日韓併合で日本の支配下におかれるまでの519年間続いた朝鮮最後の王朝である。李氏朝鮮は科挙(官吏採用試験)によって採用された文武の官僚である両班が、王を補佐する中央集権国家であり、27人の国王が治めた。

昌徳宮は1404年9月に第3代国王太宗が造営を命じ、突貫工事の末1405年10月に完成した。その後、王宮の拡張を進め、全ての工事が終わったのは1460年第7代国王世祖の時代であった。秘苑はその時に王宮の庭園



■図1—昌徳宮と秘苑の全体図 昌徳宮(手前の建物群)が誇張されているが秘苑の広さは昌徳宮の3倍近くある

として作られたものである。

昌徳宮と秘苑の歴史は、4回もの大火事に見舞われた波乱に満ちたものであった。まず1592年、豊臣秀吉の朝鮮出兵である文禄慶長の役(韓国では壬辰倭乱といわれる)でことごとく破壊され焼失してしまった。しかし復旧工事に力を入れ1614年には元の偉容を誇るまでに回復することができた。ところが、1623年に再度大火事に見舞われ焼け落ちてしまった。15年に及ぶ工事の末、1647年におおた再建された。このころから、昌徳宮が正宮として使われるようになったといわれている。その後も火災をたびたび経験し、1833年には3度目の大火事を起こしてしまった。再建されたのも束の間、1917年には4度目の大火事が発生し、その際の修復には正宮である景福宮の社殿の一部を取り壊しその旧材が利用された。1900年代にはいると、朝鮮に進出した日本人の手により、一部日本風にも改築されてしまったのである。

19世紀はじめに作られた「東闕園」には、数多くの建物が自然の中に巧みに配置されている様子が描かれているが、現在では見られなくなった建物も多い。そこに



■写真2—芙蓉池の石造りの竜頭



■写真3—芙蓉池に浮かぶ芙蓉亭



■写真1—生活色が濃く残る昌徳宮の内部

昌徳宮と秘苑がたどった波乱に満ちた時間を感じることができる。

### 3—学問研鑽の「芙蓉池」

広大な秘苑の見所は大きく4カ所に分かれる。最初の見所である芙蓉池の周辺は、学問研鑽の場であった。芙蓉池は35m四方の池で、中程に直径9mの丸い島がある。芙蓉池の水は、通常は池の底から湧き出る水であるが、雨が降った時には、西の山の水が石造りの龍頭の口から流れ込む仕組みになっている。芙蓉池の周りには、映花堂、宙合楼、芙蓉亭の3つの庵が配置されている。

科挙が行われた映花堂では、居並ぶ国王と重臣たちが、前の広場に控える国中から集まった受験生たちの人柄を見定めた。科挙に合格した若者たちは、芙蓉池を見下ろす小高い丘に建つ宙合楼で、その能力をますます高めるべく研修に励むことになる。宙合楼の1階は図書室、2階は閲覧室になっていて、1階の書庫から取り出した本を2階に持ち込み勉強に励んだ。

私たちが訪れた夏には、宙合楼の2階から見下ろす濃い緑に囲まれた芙蓉池が、心を和ませてくれた。同様に、昔も勉強に疲れた若者たちの心を和ませてくれたに違いない。宙合楼の正門である魚水門は、精巧なモザイクが施された美しい門である。魚水門のいわれは、魚(科挙に合格した若者)が清冽で豊かな水(国王)に巡り会い、竜に成り代わって昇天する(学識を高める)ことに由来する。

宙合楼での研修が終わると、芙蓉亭で国王と重臣たちから祝賀を受けた。芙蓉亭を支え



■写真4—演慶堂の舎廊とオンドルの煙突



■写真5—咲花堂の跳ね上げた障子

る柱の内2本は芙蓉池の中にあり、芙蓉亭にいと、さながら水の上に浮かんでいるような錯覚に陥る。

#### 4—民の生活を経験する「演慶堂」

第二の見所である演慶堂は、士大夫といわれた当時の知識人の住居をまねて作られた建物である。国王は衣服などすべてを士大夫と同じにして、時々演慶堂を訪れ民の生活を経験することで、政務の参考にした。

堀に囲まれた敷地の中には、主人が日常生活を送る舎廊、夫人が住む母屋、書齋として使われる善香齋が建

てられている。舎廊と母屋は、低い堀で仕切られ別の家のようになっている。これは朱子学の作法に則り、男女が生活空間を別々にしたためである。しかし中はつながった一軒の家になっていて、行き来ができるようになっておもしろい。日本の障子のような窓は、折り畳んで開けることも跳ね上げることもできる。日本と同様高温多湿の夏がある韓国ならではの工夫がなされている。一方、海に囲まれているもの大陸の一部であることから冬は寒く、どの建物にもオンドル(床下暖房)部屋が備えられている。

善香齋の裏手には、階段状の花壇が設けられていて、マツヤツツジなどの草木が植えられ、奇石怪石といわれる大きな石が置かれている。この花壇は、ヨーロッパのように刈り込んだ人工的なものではなく、あくまでも自然そのままになっている。しかし、下草や雑草はなく手入れが行き届いている。

#### 5—散策と思索の「半島池」

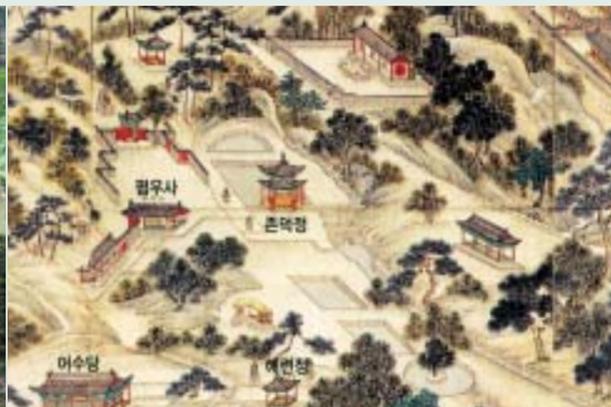
第三の見所である半島池の周辺は、自然の里山そのままの趣で、ここがソウルの中心地とはとても思えない。木々は落葉樹で、春の新緑の眩しさ、夏の鬱蒼とした涼しさ、秋の燃えるような紅葉、冬の優しい木漏れ日と、四季



■写真6—秘苑を巡る散策路



■写真7—扇型の四阿「観纒亭」



■図2—「東闕門」の一部 中央の四阿が観纒亭、その上に描かれている方形の池がかつての半島池

折々の美しさが楽しめるよう配慮されている。国王や学者たちは、宙合楼や善香齋での勉学の疲れを癒すために散策をし、より考えを高めるために思索に耽ったのであろう。

半島池は、秘苑の現存する池のなかで唯一方形ではないものである。さらに半島池の畔に建つ観纒亭は、扇を広げたような形に造られた韓国では珍しい建物である。国王は、ここで釣りに興じ日頃の激務を忘れる一時を過ごしたという。前述した「東闕図」には半島池が秘苑にある他の池と同様に、方形の池として描かれていることから、このあたり一帯は日本の統治時代に手が加えられたものともいわれている。

#### 6—深山幽谷の「玉流川」

さらに山道を登って行くと、第四の見所である秘苑の最奥に位置する玉流川に着く。この一帯はまさに深山幽谷、仙人が住んでいそうな渓谷である。間近のこずえを、カササギ、キジ、リスが飛び移っていく。

秘苑の北の山から流れ出る水と井戸から湧き出る水は、合わさって溪流となり、大石に掘られた溝を玉の如く流れ下り、人工の滝を落ちる。そして、いくつかの四阿の軒先をかすめた後、小さな水田に流れ込む。国王はこの水田で農作業を行ない、農民の生活を経験したのである。

水田の前に建つ四阿の藁葺き屋根は、秋の収穫の際に、刈り取った藁で葺いたものである。また、いくつかある四阿で、国王と重臣たちはともに座って詩を作り、議論をしたという。

#### 7—自然を活かした庭苑

秘苑の最奥部の玉流川のさらに奥まったところに龍山亭という四阿がある。第11代国王燕山君は、ここに国中の美女を集め豪勢な生活に明け暮れたといわれている。さらに秘苑を拡張しようと民家を取り壊し学問所も移してしまった。李氏朝鮮歴代の国王の中には、燕山君のような暴君もいた。その後、燕山君はクーデターによって追放される。



■写真8—玉流川の大石を流れ落ちる水

しかし、歴代の国王の多くは、秘苑で学問の錬磨と心身の修養に励み、民の生活や農作業を経験して、民に模範を示した。そして、日々の政務の疲れを秘苑で散歩や釣りをすることで癒したのである。

秘苑は国や国王の力を誇示するための華やかな庭ではなく、学問や修養や安息のための庭であった。そのため、自然を人工的に改変するのではなく、自然の中の谷や山を活かし、そこに抱かれるように建物や池を配置したのである。王宮である昌徳宮に近いところから、学問研鑽の芙蓉池、民の生活を経験する演慶堂、散策と思索の半島池、深山幽谷の玉流川と順番に配置された庭は、あたかも、政務と生活、勉学と安息、現実と理想の間の流れを体験できるようなのである。この庭の中で王達は為政者としてのあるべき姿を学んでいったのである。

#### 8—カササギの鳴く庭苑

自然との調和に優れていることから、昌徳宮と秘苑は1997年に世界遺産として登録された。

李氏朝鮮最後の皇太子李垠に嫁いだ日本の皇族梨本宮芳子(イグン)が、亡くなるまで生活していた家もあることから、毎日たくさんの観光客が訪れる人気コースになっている。

しかし、賑やかな観光客の団体が通り過ぎてしまうと、韓国の国鳥のカササギが静かに鳴く心休まる庭苑である。秘苑の片隅に佇んで、4度もの業火によって焼き尽くされた激動の歴史と、そこに暮らした国王たちの生き方に思いをはせてはどうだろうか。

#### <参考文献>

- 1) 「昌徳宮と昌慶宮」、ハン・ヨンウ、2003、悦話社
- 2) 「昌徳宮」、ガイドブック、2000、ソニン社
- 3) 「昌徳宮—韓国の古宮②」、チャン・ギョンホ他、1986、悦話堂
- 4) 「東闕図」、高麗大学校博物館所蔵、1824～1828年頃

#### <取材協力・資料提供>

- 1) 昌徳宮管理所

(写真提供: P14上、写真2、3、4、8、中村和也  
6、7、筆者  
写真1、5、9、弥勒綾子)



■写真9—玉流川の水田と藁葺きの四阿